

II. 分担研究報告

厚生労働科学研究費補助金
難治性疾患政策研究事業
分担研究報告書

萎縮型加齢黄斑変性に関する研究

研究分担者	関西医科大学眼科学教室	教授	高橋 寛二
	東京大学大学院眼科学	講師	小畑 亮
研究協力者	北海道大学大学院眼科学	教授	石田 晋
	京都大学大学院眼科学	講師	大音 壮太郎
	愛知医科大学眼科学講座	教授	瓶井 資弘

研究要旨：平成27年から開始した萎縮型加齢黄斑変性の診断基準に基づいて行った全国2次アンケート調査による疫学研究のデータ解析を施行し、日本人の萎縮型加齢黄斑変性症例の疫学的特徴を明らかにした。

A. 研究目的

網膜色素変性は、遺伝子変異が原因で網膜の視細胞及び色素上皮細胞が広範に変性する疾患である。初期には、夜盲と視野狭窄を自覚する。徐々に進行し、老年に至って社会的失明(矯正視力約0.1以下)となる例も多いが、生涯良好な視力を保つ例もある。進行に個人差が大きい。

本疾患は難病に指定されているが、診断基準が古く、実際の臨床からの乖離がみられているため、網膜色素変性の診断基準を改訂した。また網膜色素変性診療ガイドラインを作成し、平成28年12月に日本眼科学会雑誌に掲載された。

網膜色素変性の自然経過を長期に追い、予後推測の可能性を検討する。

B. 研究方法

萎縮型加齢黄斑変性の診断基準をもとに行った全国2次アンケート結果のデータを解析した。具体的には197施設から返された92例の萎縮型加齢黄斑変性のデータを分析した。

(倫理面への配慮)

本疫学研究にあたっては倫理委員会承認のもと調査を行った。

C. 研究結果

92例の分析結果は以下通りである。

- 1) 性別：男性64例、女性24例、2) 平均年齢：76.2±8.5歳、3) 罹病期間：1年未満18%、5年以上13%、4) 喫煙歴：有30%、無36%、5) 診断時視力：0.1未満；22%、0.1～0.6；47%、0.7以上；31%、5) 軟性ドルーゼン有：33%、6) reticular pseudodrusen有：40%、7) 地図状萎縮の大きさ：1乳頭径未満24%、1～2乳頭径33%、2乳頭径以上38%、8) 対側眼の所見：前駆病変20%、萎縮型加齢黄斑変性40%、滲出型加齢黄斑変性17%

D. 考按

日本人の萎縮型加齢黄斑変性について多数例の特徴を明らかにした報告は今まで見当たらない。本研究によって、性別（男女比2：1）、平均変性（76歳）、罹病期間は様々であり、喫煙歴が3分の1にあること、視力低下は高度の者が20%程度、中等度の者が約50%であり、前駆病変として軟性ドルーゼンやreticular pseudodrusenが併存するものが30～40%、地図状萎縮は2乳頭径以上の大きいものが40%、両眼性萎縮型加齢黄斑変性が40%に認められることが判明した。これらデータは日本人の本症の特徴をあらわし、今後、萎縮型加齢黄斑変性に対する対策や治療を考える上で重要であると思われる。

E. 結論

全国2次アンケート調査から得られた萎縮型加齢黄斑変性92例について分析し、日本人の本症の特徴を明らかにした。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

高橋寛二、他：萎縮型加齢黄斑変性の診断基準、日眼会誌 119:671-677, 2015

今後、山下英俊 研究班で上記の疫学調査の結果を論文化する予定である。

2. 学会発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし

2. 実用新案登録 なし

3. その他 なし